

診療所実習を通じて学んだこと

あかりこどもクリニック 3年 RW

私は、7月11日にあかりこどもクリニックで実習を行なった。本実習の目的は、地域医療のニーズを理解し、医師と社会の関わりについて理解を深めることである。私は、特に医師と患者の関係構築、大学病院と地域の診療所の違い、多職種連携、問診の重要性に着目して実習へ臨んだ。

午前中は、看護師や事務員の方と行動し、診療所におけるスタッフの役割について学んだ。最初に、全員で院内の清掃及び、椅子や机の消毒を行った。そこで、医療現場における、衛生管理の重要性を再認識した。特に小児科では、患者が見ていないところでも、気を配り、安心できる環境をつくることが重要であり、院内では子供が過ごしやすい仕組みや環境づくりが多く見られた。患者を待たせてしまう場合は、こまめに話しかけに行き、様子を伺い、不安を和らげ、困ったことがないかを確認していた。また、施設全体を見ても、様々な気遣いが見られた。駐車場は広くとってある分、車同士の接触が起こらないように間隔を広く開ける形式を取っていた。そして、院内は、子供の視線に合わせてイラストを壁に描き、親の目線に部屋の名前を書き、窮屈さを感じさせない、空をイメージしたデザインの広い天井等の設計が見られた。午前の実習で特に印象に残ったことは、予防接種の見学である。予防接種を受けに来る子供は、感染症にかかっていないことが多いため、他の患者と入口及び待合室を分けているという仕組みが見られた。また、子供を寝かせるためのタオルを床に敷くことで衛生管理を行う工夫が行われていた。予防接種を行う前には、接種間隔やワクチンの種類等に誤りがないように、事務員、看護師、医師で3重チェックが行われていた。また、予防接種後には、確認のためワクチンのロット番号を残しており、ミスが起こらないように細心の注意が払われていた。予防接種を行う際の看護師の重要な役割は、予防接以外で健康面や生活面で何か困ったことがないか聞くことである。これは子育てや仕事を行う中で何度も来院することは難しく、また、医師の前では緊張して何も質問できないという人が少なくないためである。これらのことから、多職種連携の意義や、患者が過ごしやすい環境づくりの方法及び重要性を学んだ。子供が過ごしやすい環境づくりの一環として、私は、予防接種の絆創膏にイラストを描く業務を手伝った。一見すると、医療には関係のない行為であるが、予防接種による不安や痛みによるストレスを和らげるためにも、子供が好きなイラストを描くことは重要なことである。手書きで一つ一つイラストを描くことは思いのほか難しかったが、患者一人一人に対して心をこめることの大切さを実感することができた。

午後の実習では、院長と同行し、地域の診療所における医師の役割や問診の重要性を学んだ。特に印象に残ったことは、診察時の問診や聴診についてである。今回の実習で私は、お腹の調子が悪い子供の聴診を経験した。実際にぐるぐるとしたお腹の音や、心臓の音を聴くことができ、貴重な体験をすることができた。しかし、ここで最も重要なことは、聴診により疾患を見極めることではなく、問診によって疾患を推測することである。実際、院長は診察の時間のほとんどを問診に充てていた。最初の発症及び最後に発症したのはいつ頃であるか、今までどんな薬を使っていたか、既往歴や家族歴はあるかなど多くのことを聞いていた。特に印象に残っていることは、最後に必ず、気になったことや質問がないかを患者に聞いていたことである。午前の実習でも学んだ通り、特に小児科に来る患者及びその家族は、

何度も来院するための時間を確保することが難しいことが多い。そのため一度の問診で、疾患を見極めるだけでなく、患者の不安を解消や、患者の兄弟に気になる症状が現れていないかの確認が求められる。また、年齢的な問題を多角的に見ることも必要である。例えば、幼児で風邪のような症状が表れた場合はRSウイルスの可能性を疑うこと、心拍数を確認する際には、年齢によって速さが異なることを考慮することが大切である。そして、問診だけではなく聴診も非常に重要である。クリニックで見られる疾患のほとんどは軽症であるが、川崎病やRSウイルス感染症などの重症例を見逃さないために聴診は必須である。これらの重症例は、発見や治療が遅れてしまうと、後遺症が残ることや死亡する場合も考えられる。丁寧な問診により出来るだけ多くの情報を集め、重大なリスクとなる疾患を見逃さないための聴診を行うことが重要であるということ学んだ。診察の見学の後、栄養指導とステロイドの使用と中断についての指導を見学した。これらを通して印象に残ったことは、相手に視線を合わせて、相手が理解しやすい言葉で疾患や専門用語についての説明を行っていたことである。説明の際は、現在の家庭での状況を確認した上で選択肢を複数提示し、強要するのではなく、提案する形をとり、患者の家族に寄り添っていた。また、口頭の説明だけではなく、説明書を渡すことにより、指導の内容を分かりやすくし、忘れないようにする工夫がされていた。そして、最後には必ず診察や予防接種の際と同じように、何か気になったことがないかを確認していた。午後の実習を通して、相手の立場に立って考え、共感し、思いやることの重要性を感じた。実際、診察や指導の最中及びそれらを終えた患者とその家族は全員笑顔で安心した様子であり、安心して来院できる地域の診療所の必要性を実感することができた。

あかりこどもクリニックの条文には「私たちの喜びは患者様と保護者様の笑顔をスタッフ間で共有すること」や「心に寄り添ったケアのために家庭でのそれぞれの生活も大切であることを認識しスタッフ間で思いやりを持つ」といったものがある。実習全体を通して、クリニック内外に様々な患者を安心させる工夫が見られ、スタッフ全員が感謝と思いやりの精神を持っていることを感じた。スタッフは疲れた表情を見せず、笑顔で業務を行っており、暖かい環境の職場が形成されていた。また、私たちが実習に参加する前日に起こった落雷によりクリニック内のシステムに障害が生じた際には、他職種が連携して業務を行うことにより、スムーズな診療が行われていた。こうした環境づくりによって、患者や家族も笑顔で安心した様子で診察や指導を受けることができていた。このように、安心して気軽に来院することができる環境づくりこそが地域の診療所の役割であると私は考える。今回の実習で学んだ思いやりの精神、問診の重要性、地域の診療所の役割を今後の実習や勉学に活かしたい。

最後に、今回の実習でお世話になった北原先生をはじめ、スタッフの皆様に深く感謝申し上げます。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

参考文献

- 1) 「院長紹介」(あかりこどもクリニック) <https://akari-kodomo.com/doctor.html>